

ジョン王における経済政策の失敗

A Blunder of Economic Policy in English King John

川 瀬 進

分野：経済史

キーワード：封建制度、スキューテイジ (Scutage：軍役免除金)、ル＝グーレ条約 (the Treaty of Le Goulet)、シャトー＝ガイヤール (Château-Gaillard：ガイヤール城)、インターディクト (Interdict：聖務執行禁止)、マグナ＝カルタ (Magna Carta：大憲章)

I はじめに

プランタジネット朝 (the Plantagenets) 2代目リチャード1世 (Richard I, the Lion Hearted, Cœur de Lion, 1157.9.8-1199.4.6、：在位 1189-1199) は、自身が保有するフランス南部の領地、シャリュス (Châlus) から財宝が見つかった時、この財宝を、武力で奪取しようとしたため、家臣のシャリュス領主 (the Lord of Châlus) と紛争になった。

紛争の場所となったシャトー＝シャリュス (Château-Châlus) を包囲攻撃中、リチャード1世は、1199年3月26日、クロスボウ (Crossbow) の矢を、首近くの左肩に受け、1199年4月6日、42歳で亡くなった。

この時、イングランド王室では、困惑を呈した。

というのは、リチャード1世の子供がなく、亡くなったからである。

次期イングランド王の継承に対し、イングランド王室で、多少ゴタゴタがあったものの、最終的に、リチャード1世の弟ジャン (John) が、イングランド王位を継承し、イングランド王ジョン (John, Known as Lackland, also Sword-of-Lath, 1167.12.24-1216.10.19：在位 1199-1216) になった¹⁾。

このゴタゴタとは、王位継承権を巡る権力闘争である。

即位当初のジョン王は、有力なバロン (Baron：君主から直接に封土を受

け取っている家臣、貴族)の機嫌を損なわないように、謙虚にイングランドを統制していた。

だが、ジョン王は、自身の王位継承よりも、プランタジネット王家の、甥のブルターニュ公アルテュール1世(Arthur I de Bretagne:アーサー=オヴ=ブリタニー Arthur of Brittany, 1187.3.29-1203.4.3:在位1194-1203)の方が、王位に近いとして、アルテュール1世と、対立していた。

その対立の最中、1203年4月3日に、アルテュール1世が、不可解な死を遂げた。

このアルテュール1世の不可解な死から、ジョン王のアンジュー帝国の統治は、歯車を狂わしてしまった。

この狂った歯車を元に戻すために施行した政策が、イングランドの有力なバロンたちを怒らせ、イングランド経済を疲弊させてしまった。

そこで本稿では、ジョン王の王位継承の経緯はいかなるものであったか、ジョン王の政策が、いかにイングランド経済を疲弊させたかを、考察する。

II 王位継承

フランスのアンジュー伯ジョアフリー(Count Geoffrey of Anjou)とヘンリー1世の娘マティルダ(Matilda)との長男アンリ(Henry)が1133年3月5日、フランスのル=マン(Le Mans)で誕生した。

長男アンリは、1149年に、母マティルダからノルマンディー公領を譲渡され、1152年3月18日、アキテーヌ公領の女子相続人アリエノール=ダキテーヌ(Aliénor d'Aquitaine:Eleanor of Aquitaine, c. 1122-1204.4.1)との結婚により、

1) Allen Andrews, *Kings & Queens of England & Scotland*, Reprinted of 1976, edition, Marshall Cavendish Books, 1994, p. 46.

・イングランド王ジョンのニックネームは、ラックランド(Lackland:相続領地無し王)、スワード=オヴ=ラス(Sword-of-Lath:軟弱剣王)として知られている。この相続領地無し王というのは、5男ジャン、すなわちジョン王が生まれる前、すでに、父ヘンリー2世が、自身の領地の相続を終えていた、からである。軟弱剣王というのは、対フランス戦争において、ジョン王自身の闘争心、戦略が乏しく、敗戦に至り、領土をフランスに奪われたこと、からである。

アキテーヌ公領を手にし、1154年10月25日、父の死によりアンジュー伯アンリ＝プランタジネット（Henry Plantagenet, Count de Anjou, 1133.3.25-1189.7.6）になり、さらに1154年12月19日に、ウェストミンスター＝アベイ（Westminster Abbey）で戴冠式を挙げ、プランタジネット朝創始、イングランド王ヘンリー2世（Henry II, Curtmantle, 在位1154-1189）になった。

この時、ヘンリー2世の領地は、アンジュー帝国（Anjou Empire）として拡大し、隣国フランス王が所有する領地よりも大きくなった。

ヘンリー2世のバロン（Baron：君主から直接に封土を受け取っている家臣、貴族）の多くは、イングランド海峡の両側に領地をもっていた。

また、アンジュー帝国の収入の多くは、イングランドから、齎されていた。

フランス王国内で、フランス王ルイ7世（Louis VII, c. 1120-1180：在位1137-1180）が支配する領土よりも、家臣であるヘンリー2世が支配する領土の方が、大きかった。

この主従関係と、主従関係による領土のアンバランスとが、その後のイングランド vs. フランスを引き起こした。

そのアンジュー帝国を、ヘンリー2世が、男子の子供たちに生前贈与した時、ヘンリー2世に対する多少の不満が出たものの、紛争になることはなかった。

だが、生前贈与が確定した後、5男ジャン（John, 1167.12.24-1216.10.18：後のイングランド王ジョン、在位1199.4.27-1216.12.18）が誕生した。

そこで、ヘンリー2世は、遅く誕生した末っ子5男ジャンを、もはや相続される領地がなかったので、ラックランド（Lackland：相続領地無し王）と呼んでいた。

このラックランドというニックネームは、末っ子5男ジョンが可愛いため付けたものであり、決して卑下したものではなかった。

そのことは、5男ジャンを含む、子供たちの裏切りや、反逆によって、ヘンリー2世は、1189年7月6日、56歳、シノン城（Chinon Castle）で、亡くなった²⁾後、5男ジャンが広大な領地を有し、女子相続人であるグロス

ター伯ウィリアムの娘、イザベル=オヴ=グロスター (Isabella of Gloucester, ?-1217.10.14) と、1189年8月29日に、結婚したことから分かる。

イングランドの王位継承は、ヘンリー2世の3男リチャード (Richard, duchy of Aquitaine, 1157.9.8-1199.4.6) が、1189年9月3日 (日曜日)、ウェストミンスター=アベイ (Westminster Abbey) で、戴冠式を挙げ、イングランド王リチャード1世に就いた。

この当時、キリスト教国にとって、危機的な状態にあった。

それは、1187年10月3日に、サラディン (Saladin: サラーフ=アッディーン Salah-al-Dīn al Ayyūb: サラーフウディーン, 1138-1193) が、エルサレム王国を、占領したことであった。

これに対して、教皇グレゴリ8世 (Gregory VIII, c. 1100-1187.12.17) は、キリスト教国に、聖地エルサレムの奪還を呼び掛けていた。

父ヘンリー2世は、キリスト教国連合に参加しなかった。

イングランド王に就いた3男リチャード1世は、早急に、教皇グレゴリ8世の呼び掛けに応え、十字軍のための遠征軍を立ち上げ、キリスト教国連合に参加することにした。

その遠征軍徴募に、ソールズベリー司教ヒューバート=ウォルター (Hubert Walter, Bishop of Salisbury, ?-1205.7.13) と、彼の叔父ラヌルフ=グランヴィル (Ranulf Glanvill, d. 1190)³⁾ と、有力領主たちが、志願した。

叔父ラヌルフ=グランヴィルは、ヘンリー2世治世時、王の片腕、摂政であったが、戴冠当初のリチャード1世の不興を買い失脚させられてしまった人物であった⁴⁾。

2) George Burton Adams, *The History of England: from the Norman Conquest to the Death of John* (1066-1216), in William Hunt and Reginald L. Poole, edited, *The Political History of England*, Vol. 2, reprinted of 1905, edition. AMS Press, Kraus Reprint Co., 1969, p. 357.

・ J. R. Moreton-Macdonald, *A History of France*, Vol. 1, reprinted of 1915, ed., AMS Press, Inc., 1971, pp. 136-137.

3) Marjorie Chibnall, *Reviews of Books*, *The English Historical Review*, Vol. 69, 1954, p. 92.

4) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 363.

その失脚に対し、名誉回復を行うために、ラヌルフ＝グランヴィルは、第3回十字軍遠征に、志願したのであった

リチャード1世は、イングランドを留守にする間、イーリー司教兼大法官ウィリアム＝オヴ＝ロンシャン（William of Longchamp, Bishop of Ely, d. 1197）に、イングランドの統治を任じた。

ウィリアム＝オヴ＝ロンシャンは、ノルマンディー（Normandie）の中流家庭の生まれであるが、国王に対し従順で、王以外に対しては厳格に対処した人物であった⁵⁾。

言い換えれば、ウィリアム＝オヴ＝ロンシャンは、国王の権威を守るために、法を順守し、法を犯したり、無視したりする者に対しては、厳格に対処した。

なお、ウィリアム＝オヴ＝ロンシャンは、1190年から、ローマ教皇特使にもなっていた。

リチャード1世は、イングランドで、十分な軍事力を整え、1189年12月11日、ヘイスティングズ（Hastings）を出航し、さらなる軍事力を増強するために、ノルマンディー（Normandie）に渡り、出陣した。

リチャード1世の第3回十字軍遠征のため、軍事費課税サラディン＝タイス（the Saladin tithe：サラディンの10分の1税）を、厳格に徴収したため、ウィリアム＝オヴ＝ロンシャンは、イングランド領主から不評を買った。

さらに、ウィリアム＝オヴ＝ロンシャンは、リチャード1世が、第3回十字軍遠征に出陣し、イングランドを留守にしていた時、国政を厳格に順守するが故に、5男ジャンと、衝突するが、それを制していた⁶⁾。

その結果、ウィリアム＝オヴ＝ロンシャンは、1191年10月5日、第1回のグレート＝カウンスル（a great council：大諮問会）で、5男ジャンから失脚させられ、国外追放になった⁷⁾。

5) Cyril E. Robinson, *England: A History of British Progress from the Early Ages to the Present Day*, Thomas Y. Crowell Company, 1928, p. 87.

6) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 365.
Josephine Ross, *Kings & Queens of Britain*, Reprinted of 1982, ed., London; Artus Books, 1994, p. 28.

7) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 372.

第3回十字軍遠征に出陣したリチャード1世は、エルサレム奪還のため、戦えども、戦えども、成果が上げられなかった。

結果的に、1192年8月、サラディンと、3年間の休戦協定を、結ばざるを得なかった⁸⁾。

3年間の休戦協定後、リチャード1世は、占領していたアッコン (Acco : Acre) から、船舶にて、イングランドへ帰ることになった。

この帰途の途中、不運にもヴェネツィア沖合で、暴風雨に遭遇し、船舶は難破し、リチャード1世は、陸路にて、イングランドを目指すことになった。

陸路にて、リチャード1世は、さらなる不運に遭遇した。

それは、第3回十字軍時、同じキリスト教国軍であったが、途中で仲違ひしたオーストリア公レオポルト5世 (Leopold V, Duck of Austria, ? -1194) によって、捕らわれ、拘束、幽閉されてしまったからである。

この仲違ひは、占領したアッコンの都市に、オーストリア公レオポルト5世が、自身の軍の幟 (banner) を掲げていたのを、リチャード1世が、その幟を、引き摺り下ろし、水溜りのあった塹壕の中に、放り投げたことによる⁹⁾。

リチャード1世は、1192年12月21日、オーストリア公レオポルト5世により、ドナウ川の要塞地、デュルンシュタイン (Dürnstein) のクエリンガー城 (Kuenringerburg: デュルンシュタイン城: Burg Dürnstein) に、幽閉された。

1191年末、十字軍遠征から、一足早くフランスに帰国していたフィリップ2世 (Philippe II, Auguste : オギュスト尊厳王、1165.7.21-1223.7.14、在位1180-1223) は、リチャード1世が、オーストリアで拘束、幽閉されたという情報を聞き、ヘンリー2世の5男ジャンを唆し、彼にイングランド王位を奪取させようとした。

5男ジャンは、フランスからイングランドに渡り、我が物顔でイン格蘭

8) Christopher Tyerman, *England and the Crusades 1095-1588*, The University of Chicago Press, 1988, p. 58.

9) · Austin Lane Poole, *From Domesday Book to Magna Carta 1087-1216*, in George Clark, ed., *The Oxford History of England*, Vol. 3, Second Edition, reprinted of 1955, ed., Oxford University Press, 1986, p. 362, n. 1.

· Cyril E. Robinson, *England, op. cit.*, p. 85.

ド王を気取り、王権を行使しようとしていた。

フランス王フィリップ2世自身も、ノルマンディーに、侵攻し始めた。

ノルマンディーに侵攻したフィリップ2世は、軍事的重要な要塞地ジズール (the Gisors)、ヴァクサン (the Vauxin)、エヴレサン (the Evreux) を、侵攻、奪取し始めた。

その後、リチャード1世は、捕虜として、神聖ローマ帝国ドイツ皇帝フリードリヒ1世＝バルバロッサから後を引き継いだ神聖ローマ帝国ドイツ皇帝ハインリヒ6世 (Heinrich VI, 1165.11-1197.9.28：在位1190-1197) に引き渡された。

具体的には、リチャード1世は、クエリンガー城からトリフェルス城 (Burg Trifels) に護送、幽閉され、皇帝の支配下に置かれた。

その後、リチャード1世は、釈放のため、神聖ローマ帝国ドイツ皇帝ハインリヒ6世から、身代金150,000マルクを、要求された¹⁰⁾。

その身代金を工面するために、第3回十字軍の遠征に、リチャード1世と同行していたソールズベリー司教ヒューバート＝ウォルターが、一足早く、イングランドに帰った¹¹⁾。

リチャード1世の身代金150,000マルクの内、一時金として100,000マルクを、母アリエノール＝ダキテーヌと、ソールズベリー司教ヒューバート＝ウォルターとが、用意し始めた。

すなわち、母アリエノール＝ダキテーヌは、自身の資産から、身代金の1部を用意し、また、ソールズベリー司教ヒューバート＝ウォルターは、その足りない金額を、イングランド中を奔走し、掻き集め始めた。

リチャード1世は、このソールズベリー司教ヒューバート＝ウォルターの功績に対し、1191年から、空席になっているカンタベリー大司教の座を、彼に就かせるよう、ローマ教皇ケレスティヌス3世 (Coelestinus III, 1191-1198) に要請した。

10) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 375.

11) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 375.

その結果、1193年、ソールズベリー司教ヒューバート＝ウォルターは、カンタベリー大司教ヒューバー＝ウォルターになった¹²⁾。

なお、ウィリアム＝オヴ＝ロンシャンも、追放された海外から、リチャード1世の釈放のため、尽力した。

結果的に、母アリエノール＝ダキテーヌと、カンタベリー大司教ヒューバート＝ウォルターとの努力が功を奏し、一時金としての身代金100,000マルクが掻き集められ、リチャード1世は、1194年2月4日、トリフェルス城から釈放され、自由の身となった¹³⁾

残りの身代金50,000マルクは、当然、イングランド国民からの課税で支払われた。

言い換えると、この課税は、リチャード1世が捕らわれの身になって、保釈されるまで（1192.12.21-1194.2.4）、約1年2カ月ちょっとの間、イングランド国民からの重課税であった。

自由の身となったりリチャード1世は、イングランドへの帰途の途を急いだ。

イングランドに、1194年3月16日、帰国したりリチャード1世は、フランス王フィリップ2世から唆された5男ジャンの反乱を、収めた。

イングランドを、平穩にした後、リチャード1世は、フランスの軍事力が、ノルマンディーのヴァクサン（the Vexin）を侵攻したり、ノルマンディーの首都ルーアン（Rouen）へ接近したりしたため、すなわち宿敵フィリップ2世と戦うために、1194年4月17日、ウィンチェスター（Winchester）で出陣式を挙げ、向い風の天候を避け、1194年5月12日、フランスに渡った¹⁴⁾。

12) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 376.

13) Austin Lane Poole, *From Domesday Book to Magna Carta 1087-1216*, in George Clark, ed., *The Oxford History of England*, Vol. 3, Second Edition, reprinted of 1955, ed., Oxford University Press, 1986, p. 365.

• George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 377.

14) Kenneth O. Morgan, edited by, *The Oxford History of Britain*, John Gillingham, "The Early Middle Ages(1066-1290)", Reprinted of 1984, ed., Oxford University Press, 1993, p. 147.

• George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 378.

• Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 369.

再度、イングランドを留守にするリチャード1世は、イングランドの統治を、カンタベリー大司教ヒューバート＝ウォルターに任せるため、1194年、彼を大法官に任命した¹⁵⁾。

リチャード1世は、アングロ＝サクソン人 (the Anglo-Saxon) の旧フィアード (Fyrd：農兵、民兵) が、1181年、アサイズ＝オヴ＝アームズ (Assize of Arms：武器保有条例) により、改良された新フィアード (Fyrd：国民軍) を引き連れ、自身の保有するノルマンディーに乗り込んだ¹⁶⁾。

リチャード1世が対フランス戦争を行う場合も、戦費は、当然、イングランドのバロンたちの課税から、捻出された。

新フィアードを引き連れたリチャード1世軍は、フレトヴァル (Frétevale) において、フランス軍と衝突した。

1194年7月3日、リチャード1世軍は、新フィアードの活躍により、このフレトヴァルでの戦いにおいて、勝利を収めた。

反対に、フランス軍は、屈辱的な大敗を喫してしまった¹⁷⁾。

この両者の戦いに、教皇ケレスティヌス3世 (Coelestinus III, 1191-1198) が調停に乗り出した。

というのは、両王が衝突している丁度その時、教皇ケレスティヌス3世が、スペインにイスラム教徒が侵攻し始めているという情報を聞き、キリスト教徒同士、お互いに戦っている場合ではない、と判断したからである¹⁸⁾。

その調停の結果、1196年1月15日、ガジャー条約 (The Treaty of Gaillon) が締結された¹⁹⁾。

そして、その調停の内容は、フィリップ2世が、ジズールと、ノルマンディーのヴァクサンを所有し、リチャード1世が、ベリー (Berry)、イソウダン (Issoudum)、グラカー (Graçai) を所有する、ということであった²⁰⁾。

15) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 379.

16) Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 369.

17) J. R. Moreton-Macdonald, *A History of France*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 139.

18) J. R. Moreton-Macdonald, *A History of France*, Vol. 1, *ibid.*, p. 139.

19) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 380.

・ J. R. Moreton-Macdonald, *A History of France*, Vol. 1, *ibid.*, p. 139.

軍事的重要な要塞地ジゾール (the Gisorewo) を所有できなかったことに
対し、リチャード1世は、ノルマンディーの防衛に、危機感を持った。

ノルマンディーが、フランス領土になるということは、アンジュー帝国が
崩壊し、延いては、イングランド王国も存続できないということを意味する
のである。

そこで、リチャード1世は、フランスとの国境沿いにあるジゾールから、
さらなる侵攻を防ぐために、1197年から1198年にかけて、セヌ川を眼下
に見下ろす急峻な崖の岩山に、11,500パンドの経費をかけ、軍事的要塞シャ
トー＝ガイヤール (Château-Gaillard：ガイヤール城) を、築城した²¹⁾。

蛇行するセヌ川の急峻な川岸に築城されたレ＝ザントリ (Le Andelys)
のシャトー＝ガイヤールは、直線で北西約30キロメートルにプランタジネッ
ト王家・ノルマンディー公国の首都ルーアン (Rouen)、また直線で南西約
80キロメートルにフランス王国の首都パリがある。

フランス王フィリップ2世にとって、このシャトー＝ガイヤールを、奪取
するということは、パリから海までの交通路を、手に入れたということにな
る。

このようなことから考えると、フィリップ2世にとっては、多少の犠牲を
払っても、手に入れたい要塞シャトー＝ガイヤールである。

シャトー＝ガイヤールを拠点として、フィリップ2世と戦っている間、リ
チャード1世は、自身が保有するフランス南部の領地、リムーザン (Limousin)
地方、シャリュス (Châlus) から財宝が見つかった。

軍事費確保のため、リチャード1世は、この財宝を、武力で奪取しようと
したため、家臣のシャリュス領主 (the Lord of Châlus) と紛争になった²²⁾。

この紛争の場所となったシャトー＝シャリュス (Château-Châlus) を包囲

20) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 380.

・ J. R. Moreton-Macdonald, *A History of France*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 139.

21) Nicholas Hooper & Matthew Bennett, edited, *The Cambridge Illustrated Atlas of Warfare: The Middle Ages 768-1487*, Cambridge University Press, 1996, p. 54.

22) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 386.

攻撃中、リチャード1世は、1199年3月26日、クロスボウ（Crossbow）の矢を、首近くの左肩に受け、1199年4月6日、42歳で亡くなった²³⁾。

この亡くなる時、リチャード1世は、遺言として、自身の後継者に、5男ジョンの名前を残した²⁴⁾。

リチャード1世には、法的後継者の子供がいなかった²⁵⁾、この時点で、イングランド王位継承者は、上位に、ヘンリー2世の4男、ブルターニュ公ジョフロワ2世（Geoffroy II de Bretagne：ジェフリー Geoffrey of Brittany, 1158.9.23-1186.8.19）の長男ブルターニュ公アルテュール1世（Arthur I de Bretagne：アーサー＝オヴ＝ブリタニー Arthur of Brittany, 1187.3.29-1203.4.3：在位1194-1203）であり、下位に、5男ジャンであった。

なお、4男ブルターニュ公2世は、1186年8月19日、馬上試合で、亡くなっている²⁶⁾。

アルテュール1世は、父ジョフロワが、ブルターニュ女子相続人コンスタンス＝ドゥ＝ブルターニュ（Constance de Bretagne, 1161-1201.9.5：在位1166-1196）の所に、婿養子に行き、生まれた男の子供であり、5男ジャンにとって甥子であった。

イングランドの慣習法により、結果的に、王位継承は、5男ジャンよりも、甥のブルターニュ公アルテュール1世の方が上位であったので、アルテュール1世が、王位を継承するものと考えられていた²⁷⁾。

だが、後継者2人の内、どちらか1人が相続する領地は、フランス王領よりも大きい、イングランド王国を含む広大なアンジュー帝国であった。

この王位継承問題に対し、フランス領内のアンジュー（Anjou）、メーヌ（Maine）、トゥレーヌ（Touraine）のバロン（Baron：君主から直接に封土を受け取っている家臣、貴族）たちは、アルテュール1世を支持し、イングラ

23) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 386.

Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 378.

24) Josephine Ross, *Kings & Queens of Britain*, *op. cit.*, p. 34.

25) Kenneth O. Morgan, *The Oxford History of Britain*, *op. cit.*, p. 148.

26) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 346.

27) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 370.

ンドとノルマンディーのバロンたちは、5男ジャンを支持した²⁸⁾。

なお、フランス王フィリップ2世は、ブルターニュ公アルテュール1世を、支持した。

だが、結果的に、アルテュール1世が、12歳足らずの若者であり、アンジュー帝国を治めるには、力不足であり、また、兄リチャード1世の遺言や、母アリエノール＝ダキテーヌが、5男ジャンを支援したことで、5男ジャンが後継者に決まり²⁹⁾、1199年5月27日、ウェストミンスター＝アベイで、戴冠式を挙げ、イングランド王ジョンになった³⁰⁾。

Ⅲ ル＝グーレ条約 (the Treaty of Le Goulet)

イングランド王に就いたジョン王は、まず初めに、自身の後継者について考え、子供のできなかつた最初の妻グロスター伯ウィリアムの娘、イザベルと離婚した³¹⁾。

この離婚により、広大なグロスター伯領を、女子相続人イザベルに返すのが一般的であったが、ジョン王は、アンジュー家の財政収入を減少させないために、言い換えると王領地としての財政収入を維持するために、そのグロスター伯領の大部分を所有し、課税を徴収した³²⁾。

このことにより、課税を支払わなければならないグロスター伯領のバロンたちから、反感を買った。

また、このグロスター伯領のバロンたちが、ジョン王に対し課税を支払うということは、ジョン王が、フランスと戦争する時、必ず、戦費として、重税を課せられるということの意味している。

この重税が、度重なるごとに、グロスター伯領のバロンたちの反感を買い、

28) Kenneth O. Morgan, *The Oxford History of Britain*, op. cit., p. 148.

29) Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, op. cit., p. 378.

・ Kenneth O. Morgan, *The Oxford History of Britain*, op. cit., p. 148.

30) Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, op. cit., p. 378.

31) Kenneth O. Morgan, *The Oxford History of Britain*, op. cit., p. 148.

・ Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, op. cit., p. 380.

32) Cf. George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, op. cit., p. 397.

反ジョン王になっていった。

ジョン王は、戴冠後すぐに、スコットランド王と領有権について、争いが起こった。

すなわちイングランド北西部、カンバーランド (Cumberland) とノーサンバランド (Northumberland) との領有権争いである。

この領有権争いを軍事的に解決させるために、ジョン王は、ナイトフィー (knight's fee : 騎士領) 20 シリングの上に2マルク上乗せしたスキューテイジ (Scutage : 軍役免除金) を徴収した³³⁾。

このスキューテイジは、何らかに理由で、年に40日間の軍役義務をできないバロンに対し、それに代わる奉仕義務税である。

そして、ジョン王は、自身の最大責務として、自身の地位を固め、アンジュー帝国の領土を維持、防衛、財産保持、増大を、考えなければならなかった。

というのは、父リチャード1世が亡くなった後、すなわちジャン自身が、イングランド王に就いた後、甥のブルターニュ公アルテュール1世を支持するアンジュー、メース、トゥレーヌが、アンジュー帝国から離反し始めたからである。

これらの離反により、所有領土が減少するという事は、イングランド王ジョンにとって、以前のように、それらの地方から得られる課税収入が、見込まれなくなってしまった、ということの意味する。

課税収入が減少するという事は、当然、軍事力の低下を齎すということである。

そこで、ジョン王は、実際に、フランス王フィリップ2世に奪われたノルマンディーの軍事的重要な要塞地ジズール、ヴァクサン、また甥のブルターニュ公アルテュール1世から、反旗を翻した領土を、取り返すことにした³⁴⁾。

この甥のブルターニュ公アルテュール1世は、当然、フィリップ2世から支援を受けており、ジョン王にとって、王の地位そのものを崩壊させる危険

33) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 395.

34) David Hume, *The History of England; from the Invasion of Julius Caesar to The Revolution in 1688*, Vol. 1, Reprinted of 1778, ed., LibertyClassics, 1983, p. 409.

人物であった。

そこで、ジョン王はイングランドの統治を、大法官兼カンタベリー大司教ヒューバート＝ウォルターに任せ、ノルマンディーに渡り、権力に物を言わせて、甥のブルターニュ公アルテュール1世を、彼の執事であり、有力なアンジューのバロンであるウィリアム＝デ＝ロシェ（William des Roches : Guillaume des Roches, 1165-1222）から、引き離せ、捕らえようとした³⁵⁾。

身の危機感を感じた甥のブルターニュ公アルテュール1世は、ジョン王の捕縛から逃れ、フィリップ2世のもとに走った。

この時から、ジョン王軍と、フィリップ2世軍との単発的な紛争が続いた。この単発的に続いた紛争は、ジョン王軍の方が、不利であった。

この紛争に、教皇インノケンティウス3世（Innocentius III, c. 1160-1216.7.16 : 在位1198-1216）が、停戦協定に乗り出した。

停戦協定、すなわち和平会談が、1200年1月、ジョン王と、フィリップ2世との間で行われた。

不利な立場で和平会談に臨んだジョン王は、この会談の第1義的な目的を、フィリップ2世に対し、甥のブルターニュ公アルテュール1世の支援を、止めてもらうことにした。

そのためには、すなわち和平を得るためには、ジョン王は、フィリップ2世に対し、オマージュ（Homage : 臣従礼）を、執らなければならなかった³⁶⁾。

このオマージュにより、封主がフィリップ2世であり、封臣がジョン王になった。

これにより、ジョン王は、フランス王国内での、ブルターニュを含むアンジュー帝国領地が、法的に、フィリップ2世によって認められた。

また、この時、甥のブルターニュ公アルテュール1世は、ジョン王に対し、オマージュを執った³⁷⁾。

35) · Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 379.

· George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 395.

36) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 396.

37) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 396.

これにより、アルテュール1世によるブルターニュ領地の所有が、法的に、ジョン王によって認められた。

ジョン王が、この和平会談において、なぜ不利な立場で、臨まなければならなかったのであろうか。

それは、ジョン王自身の多くの家臣、バロンたちが、第4回十字軍（1202-1204）の準備に関わっていたり、出兵していたりした、兵力が落ちていたからである³⁸⁾。

その結果、ジョン王は、1200年5月22日、フィリップ2世と、ル=グーレ条約（the Treaty of Le Goulet）という和平条約を、不本意にも、締結しなければならなかった。

このル=グーレ条約により、ジョン王は、ヴェクサン（the Vexin）とエヴレサン（the Evreux）とを、フランス王側に割譲され、20,000マルクの上納金を支払うという、重い代償を支払わされてしまった³⁹⁾。

条約というものは、対等な立場で結ぶものである。況して、平和条約となると、お互いに納得した上で、結ばれるものである。

だが、このル=グーレ条約は、フィリップ2世側からみた和平条約であり、かなりフィリップ2世側に有利な条約であった。

当然、ジョン王側にとって、かなり不利で、領土の喪失だけではなく、賠償金までも支払わざるを得なかった条約であった。

フィリップ2世に対するジョン王の弱腰外交の結果、このル=グーレ条約が、締結されたのである。

38) · Cf. Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 381.

・第4回十字軍は、イスラム教徒によるキリスト教国圏の危機に対し、ローマ教皇インノケンティウス3世（Innocentius III, 1198-1216）が、北フランスのバロンやナイト（Knight：騎士）に呼びかけ結成された、十字軍である。

39) · Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 379.

・ J. R. Moreton-Macdonald, *A History of France*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 140.

・ George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 396.

IV アルテュール1世

ル＝グーレ条約後、ジョン王は、アキテーヌ公領の安定化のため、アンジューの支配に反対していた西部地方のポワトゥー (Poitou) のルジニャン (Lusignan) 家を、訪れた。

この時、ジョン王は、ルジニャン家のユーグ9世＝ドゥ＝ルジニャン (Hughes IX de Lusignan) の婚約者、アングレーム伯 (Angoulême) のイザベラ＝オヴ＝アングレーム (Isabella of Angoulême, 1188-12465.31) を見て、恋に落ちてしまった⁴⁰⁾。

ジョン王は、この若くて美しいアングレームの女子相続人、12歳のイザベラと、1200年8月30日、第2回目の結婚をした⁴¹⁾。

この第2回目の結婚は、強引な略奪結婚である。

この強引な略奪結婚が、ジョン王を、窮地に立たせ、その後のノルマンディーを失う結果になってしまった。

ジョン王は、花嫁イザベラ＝オヴ＝アングレームを、イングランドに連れ帰り、1200年10月8日、正式に、王妃として戴冠式を行った⁴²⁾。

婚約者を略奪されたユーグ＝ドゥ＝ルジニャンは、ジョン王の理不尽な行動に、黙ってはいられず、ジョン王の所領の封主である、フランス王フィリップ2世に、この状況を訴えた。

同様に、ポワトゥーのバロンたちも、ジョン王の行動に、憤りを感じ、反ジョン王になり、ジョン王を、フィリップ2世に訴えた。

訴えを聞いた封建領主のフィリップ2世は、1201年の夏、フランスに戻ったジョン王とポワトゥーのバロンたちとの調停に乗り出した⁴³⁾。

だが、調停は不調に終わり、ポワトゥーのバロンたちの感情は、さらに激化し、ルジニャン家の不満も、増殖していった。

40) Josephine Ross, *Kings & Queens of Britain*, op. cit., p. 34.

41) ・ George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, op. cit., p. 397.
・ Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, op. cit., p. 380.

42) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, op. cit., p. 398.

43) Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, op. cit., p. 380.

これらの訴えや、反ジョン王の行動に対し、フィリップ2世は、1202年3月25日に、パリの裁判所に、ジョン王を、召喚した⁴⁴⁾。

この召喚に対し、ジョン王は、イングランド王として無視し、拒否した。

このジョン王の拒否に対して、封建領主のフィリップ2世は、1202年4月30日、ジョン王に、封建家臣としての義務を果たしていないとして、フランスでのすべての領地を没収する、という宣告を下した。

そして、フィリップ2世は、ノルマンディーを除いて、ポワトゥーとアンジューとの領地を、甥のブルターニュ公アルテュール1世のもとに戻すよう、命じた⁴⁵⁾。

これにより、ジョン王vs. アルテュール1世 + フィリップ2世という構図になった。

アルテュール1世が、ジョン王と戦っている時、すなわちジョン王の母アリエノール＝ダキテーヌが、小規模な軍隊で、ポワトゥーのミルボー城 (the castle of Mirebeau) に居る情報を得た⁴⁶⁾。

アリエノール＝ダキテーヌは、ジョン王にとって、最大の理解者、支持者であるので、アルテュール1世は、即、自身にとって祖母アリエノール＝ダキテーヌを、捕らえるために、ミルボー城を攻囲した。

生命の危険を感じたアリエノール＝ダキテーヌは、ミルボー城から、ル＝マン (Le Mans) に居る5男の息子、ジョン王に、助けの手紙を書いた。

助けの手紙を手にしたジョン王は、ミルボー城の戦いに臨むために、迅速に準備し、ル＝マンから、約80マイル強離れたミラボー城へ、48時間以内で着き、攻囲軍を急襲した。

その急襲は、1202年8月1日のことであり、ジョン王は、母アリエノール＝ダキテーヌを救出し、逆に、アルテュール1世を、捕らえた⁴⁷⁾。

そして、ジョン王は、捕らえたアルテュール1世を、ノルマンディーの駐

44) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 399.

45) J. R. Moreton-Macdonald, *A History of France*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 141.

・Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, pp. 380-381.

46) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 400.

屯地ファレーズ (Falaise) の牢獄で、幽閉した⁴⁸⁾。

アルテュール 1 世が、幽閉されている間、アルテュール 1 世の家臣の多くが、ジョン王に対し反旗を翻し、フィリップ 2 世を頼り、彼に対し、オマーージュを執った⁴⁹⁾。

その後、ジョン王は、継承争いで対立している甥のブルターニュ公アルテュール 1 世を、ファレーズの牢獄から、ルーアン (Rouen) の牢獄に移した。

ルーアンの牢獄に移ったブルターニュ公アルテュール 1 世は、間もなく、1203年4月3日に亡くなった。

1203年4月3日のアルテュール 1 世の獄中死は、自然死か、突然死か、殺害か、分らない⁵⁰⁾。

情況判断として、ジョン王が、疑われる。

だが、ジョン王が、フランスの貴族を使って、アルテュール 1 世を殺害したとして非難される話は、その後のルイ 8 世 (Louis VIII, 1223-1226) によって捏造された伝説である⁵¹⁾。

当時の一般的情況判断として、やはり、ジョン王が、アルテュール 1 世の殺害に、関与しているとして、疑われた。

このジョン王への嫌疑が、ジョン王への信頼感を失わせ、ジョン王の軍勢力低下を齎した。

というのは、ジョン王の支持者、特にブルターニュのバロンをはじめ、フランス領内のバロン支持者たちが、同じプランタジネット家のアルテュール 1 世を殺害した嫌疑に、強いショックを受け、ジョン王を、見放していったからである。

47) · Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 382.

· George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 400.

· F. M. Powicke, "King John and Arthur of Brittany", *The English Historical Review*, Vol. 24, 1909, p. 660.

48) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 400.

49) J. R. Moreton-Macdonald, *A History of France*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 141, n. 2.

50) · Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 382.

· George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 401.

51) J. R. Moreton-Macdonald, *A History of France*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 141, n. 3.

その結果、ジョン王のフランス領内のバロンの多くが、ジョン王を支持しなく、フィリップ2世軍に、抵抗しなくなっていった。

戦力が激減したジョン王は、王軍を引き連れ、ノルマンディーの最後の砦であるシャトー＝ガイヤール（Château-Gaillard：ガイヤール城）に向かわざるを得なかった。

というのは、1202年4月30日、フィリップ2世が、封建的家臣の義務違反で、ジョン王に対し、ジョン王の全領地没収宣言を行い、1203年に、プランタジネット王家の本拠地である首都ルーアン（Rouen）の存続のカギを握っているシャトー＝ガイヤールを、攻囲させていたからである⁵²⁾。

だが、ジョン王は、フィリップ2世軍の圧倒的な攻囲により、援軍を送ることができなかった。

1203年9月のフィリップ2世軍の攻囲により、シャトー＝ガイヤールは、落城寸前の危機的な状況に置かれていた⁵³⁾。

シャトー＝ガイヤールに援軍を送れないまま、ノルマンディーの大半が、フィリップ2世の勢力下に入ったため、1203年12月5日、ジョン王は、身の危険を感じ、イングランドに逃れた⁵⁴⁾。

イングランドに逃れて来たジョン王は、失地回復のため、イングランドバロンたちに、重税を課した。

この時の重課税は、スキューテイジ（Scutage：軍役免除金）である。

ジョン王は、フィリップ2世のイングランド侵攻を防ぐために、イングランド南部の海岸沿い、要塞城を築城するために、このスキューテイジを充てた⁵⁵⁾。

イングランドのバロンたちにとってみれば、対フランス戦争の度如に、重税を課せられ、疲弊していた。

52) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 403.

53) Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 384.

54) · Cf. Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 430.

· George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 404.

55) Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 439.

要塞シャトー＝ガイヤールは、1203年9月の攻囲から、6カ月間、持ち堪え続けたが、ついに1204年3月6日に、陥落してしまった⁵⁶⁾。

シャトー＝ガイヤールの陥落により、ノルマンディー公国の首都ルーアンは、フィリップ2世に、支配されてしまった。

その1カ月足らずの1204年4月1日、82歳の母アリエノール＝ダキテーヌが、逝去した⁵⁷⁾。

ジョン王は、フィリップ2世に対する、逆転するような何ら良い手立てが打てず、結果的に、1204年6月24日、フィリップ2世によって、ノルマンディー公国を占領されてしまった⁵⁸⁾。

フィリップ2世は、ノルマンディーの征服後、メーヌ、トゥレーヌ、ポワトゥー、アンジューを、征服していった。

ジョン王は、要塞シャトー＝ガイヤールを、陥落させられ、ノルマンディーを喪失したことによって、アンジュー帝国内のメーヌ、トゥレーヌ、ポワトゥー、アンジューを、次々と喪失してしまった。

ジョン王が、この要塞シャトー＝ガイヤールを、守れなかったことが、アンジュー帝国の崩壊を招いてしまった。

このアンジュー帝国の崩壊要因は、当然、ジョン王の政治的政策の失敗、経済的政策の失敗によるのである。

特に経済政策の失敗というのは、ジョン王の対フランス戦争により、イングランド国民から度重なる重税を、課したことに依るのである。

ジョン王の大陸領土が、しだいに、フィリップ2世により支配され、縮小し出した。

ただし、母アリエノール＝ダキテーヌの生まれ故郷アキテーヌの中心地ガスコーニュ (Gascony) だけは、事情が異なり、フィリップ2世の支配下に

56) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 404.

・ J. R. Moreton-Macdonald, *A History of France*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 142.

・ Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 384.

57) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 405.

58) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 405.

入らなかった。

ガスコーニュが、フィリップ2世の支配下に入らなかった理由は、ガスコーニュは、古くからの封建独立スタイルを保っており、そのバロンたちが、近いフィリップ2世による支配よも、遠いジョン王の支配を、好んだからである⁵⁹⁾。

その後、ジョン王は、失地回復のため、フランスに渡り、ポワトゥーとアンジューとに侵攻したが、戦力低下のため、フィリップ2世軍に撃破されてしまった⁶⁰⁾。

反対に、フィリップ2世は、1204年から1205年にかけて、ポワトゥーを占領し、ブルターニュ内に、侵攻していった⁶¹⁾。

兄リチャード1世から受け継いだアンジュー帝国、ジョン王治世時になると、しだいに大陸領土が、縮小していった。

ジョン王は、この大陸領土の縮小を、少しでも食い止めたいと思い、フィリップ2世と戦った。

だが、ジョン王の政治的戦略の失敗、経済的政策の失敗により、ことごとく、フィリップ2世に、大敗してしまった。

ジョン王は、外交上の交渉が下手で、かつ弱腰であったので、イングランドにとって不利な条件で、ル=グーレ条約を締結せざるを得なくなったり、ノルマンディーを喪失せざるを得なくなったりした。

そこで、このジョン王を、その後の歴史家たちが、スワード=オヴ=ラス (Sword-of-Lath：軟弱劍王)、ソフトスワード (Softsword：ソフト劍王)⁶²⁾と呼ぶようになった。

V インターディクト (Interdict：聖務執行禁止)

ジョン王は、1203年12月5日に、イングランドに逃れて以来、イングラ

59) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 405.

60) J. R. Moreton-Macdonald, *A History of France*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 142.

61) J. R. Moreton-Macdonald, *A History of France*, Vol. 1, *ibid.*, p. 142.

62) Allen Andrews, *Kings & Queens of England & Scotland*, *op. cit.*, p. 46.

Josephine Ross, *Kings & Queens of Britain*, Artus Books, 1982, p. 35.

ンドから、大陸の失地回復を狙った。

それには、外国の傭兵を雇うための、莫大の戦費が必要である。

イングランドのバロンをはじめ、国民から、さらなる課税を徴収するには、もう限界が来ている。

そこで、ジョン王は、戦費を、莫大な黄金やお金を保有している教会に、目を付けた。

1205年7月13日、カンタベリー大司教ヒューバート＝ウォルターが亡くなった。

ヒューバート＝ウォルターの死により、後任のカンタベリー大司教を巡って、問題が生じた。

カンタベリー大司教管区での大司教の選出に関する問題、すなわち、聖職叙任権に関する問題である。

言い換えると、高位聖職者の任命が、国王によってなされるべきか、教皇によってなされるべきか、という問題である。

ヘンリー2世が、トマス＝ベケットを殺害した時、国王の権利が縮小された。

ジョン王は、自身の治世時になると、プロアのスティーヴン王 (Stephen de Blois, c. 1096-1154.10.25, 在位 1135-1154) 治世時に、教会が得ていた独立性⁶³⁾を減少させ、自身による大司教の指名を、考えていた⁶⁴⁾。

だが、カンタベリーのキリスト教修道士会は、ヒューバート＝ウォルターが亡くなったまさにその夜に、秘密裏に、ジョン王からの選出許可無しに、後任に、キリスト教の修道院次長レジナルド (Reginald, sub-prior of Christ Church) を選出した⁶⁵⁾。

これに対し、ジョン王は、カンタベリー大司教ヒューバート＝ウォルターが、イングランドのバロン、国民から、戦費を調達したり、恣意的な重課税

63) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 195.

64) Cf. George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 408.

65) Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 444.

・David Hume, *The History of England*; Vol. 1, *op. cit.*, p. 421.

を課したりする場合、多少反対されたものの、絶対に必要な人物であった、ということを考慮し、イングランド出身で、親友で、腹心のノリッジ司教ジョン＝ドゥ＝グレー（John de Grey, Bishop of Norwich, d. 1214）を選んだ⁶⁶⁾。

この両者の候補に対し、教皇インノケンティウス3世は、拒否し、自身の選んだ、枢機卿スティーヴン＝ラングトン（Stephen Langton, c. 1150-1228）を、1207年6月17日、カンタベリー大司教に就けた⁶⁷⁾。

このスティーヴン＝ラングトンのカンタベリー大司教の就任に対し、王権を無視した裁定として、ジョン王は、反抗した。

この反抗は、当然、ジョン王が、教会法よりも、王権の方が優越であるということを示したい、ということであった。

ジョン王は、1204年6月24日に、ノルマンディーを喪失して以来、アキテーヌの中心地ガスコーニュを除いて、1208年までに、アンジュー家の大陸領土を、フランス王の手に奪取されてしまった⁶⁸⁾。

ジョン王の大陸領土喪失は、当然、外人部隊である傭兵を、雇えなかったからである。

雇えない理由は、イングランド国民からの課税が、十分に徴収できなかったからである。

それは、当然、イングランド国民が、ジョン王の度重なる、恣意的な課税を拒否したからである。

さらに、教皇インノケンティウス3世との対立において、ジョン王は、もはや失地回復を願うだけで、失地回復のための軍事行動を、実行することができなかった。

このジョン王の反抗に対し、またジョン王に譲歩を強いるために、教皇インノケンティウス3世は、1208年3月24日、イングランド全土に、インターディクト（Interdict：聖務執行禁止）を布告した⁶⁹⁾。

66) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 408.

・ Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 444.

67) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 410.

68) J. R. Moreton-Macdonald, *A History of France*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 142.

インターディクトにより、イングランド全土では、教会が閉鎖され、教会の鐘は鳴らなくなり、ミサは教会の外庭で行われ、結婚式は教会の外で行わなければならない、さらに、死者は街の外に運ばれ、教会の祈り、司祭、儀式なしに、道路端の溝に埋められた⁷⁰⁾。

インターディクトの対抗処置として、ジョン王は、インターディクトに従う聖職者たちの土地、財産を没収した。

また、ジョン王は、1205年7月13日、カンタベリー大司教ヒューバート＝ウォルターが亡くなった以降、空位になっているカンタベリー大司教の領地から齎される地代を、王室財政の中に入れた。

スティーヴン＝ラングトンは、このような異常な状況を改善させるために、教皇インノケンティウス3世と、ジョン王との間を、行き来した。

だが、スティーヴン＝ラングトンの努力にも関わらず、解決策が見出せない儘でいた。

教皇インノケンティウス3世は、自身の裁定に従わないジョン王に対し、業を煮やし1209年11月、ジョン王を破門した⁷¹⁾。

だが、イングランド王国内のジョン王の軍事力は、強力であったので、破門での影響を、あまり受けなかった。

反対に、ジョン王は、インターディクトに従った聖職者から没収した土地や、財産や、地代で得た資金で持って、傭兵を雇い、1210年6月20日からアイルランド遠征に出かけた⁷²⁾。

なお、ジョン王は、1210年8月から1212年8月までの間に、イングランドにて、今まで前例のないほどの最大の軍事力を組織し、スコットランド、ウェイルズ、アイルランドに、最大の権力を行使し、統治し、1212年春、フランスでの失地回復を、本気で考えるようになった⁷³⁾。

69) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 412.

70) Cyril E. Robinson, *England*, *op. cit.*, p. 93.

71) Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 448.

72) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 418.

73) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 418.

破門されたことを意に介しないし、譲歩もする気がないジョン王に対し、教皇インノケンティウス3世は、最終手段として、1212年、王位の廃位教書(a bill of deposition)を發布した⁷⁴⁾。

破門されたジョン王は、もはやキリスト教徒ではなくなったので、教皇インノケンティウス3世は、ジョン王の討伐に、十字軍を組織させ、そのリーダーに、フィリップ2世を就けた。

これに対抗するためジョン王は、フィリップ2世や、教皇に反対する巨大な同盟軍を、組織することを考えた。

その考えに同調し、1212年5月、フランス王とトラブルを起こしたブルゴニュ公(the Count of Boulogne)が、ロンドンにやって来て、ジョン王に臣従の礼を執り、ジョン王同盟軍に入った⁷⁵⁾。

また、ドイツ皇帝の継承問題で、教皇とトラブルを起こしたジョン王の甥、神聖ローマ帝国ドイツ皇帝ヴェルフェン家オットー4世(Otto IV, the Guelfic emperor)も同盟軍に加わった⁷⁶⁾。

これに対し、フィリップ2世は、1212年11月19日、神聖ローマ帝国ドイツ皇帝ホーエンシュタウフェン家フレデリック2世(Hohenstaufen Frederick II, the emperor)を、同盟軍に入れ、十字軍を組織した⁷⁷⁾。

ジョン王に対する王位の廃位教書により、フィリップ2世は、公然と聖戦として、1213年、イングランドに進攻することができた。

ジョン王は、巨大な権力を握る教皇インノケンティウス3世に反抗したのは良いが、軍事力において、自国軍が聖戦軍に劣っているため、勝ち目がないと、感じた。

その結果、1213年5月13日、ジョン王は屈服し、ステイーヴン=ラング

74) · Cf. J. K. Sikes, 'A Possible Marsilian in Ockham', *The English Historical Review*, Vol. 51, 1936, p. 497.

· Cf. J. C. Holt, Short Notices, *The English Historical Review*, Vol. 84, 1969, p. 606.

· Cf. George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 422.

75) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 419.

76) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 419.

77) Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 452.

トンを、カンタベリー大司教として、迎えることに同意した⁷⁸⁾。

その2日後の1213年5月15日、ジョン王は、教皇インノケンティウス3世に対し、封建家臣として、イングランド王国を、教皇に寄進し、再度王国を封土として所有し、賠償年金1,000マルク支払うということで、教皇に忠誠を誓い、臣従の礼を執った⁷⁹⁾。

VI マグナ=カルタ (Magna Carta : 大憲章)

ジョン王が、教皇インノケンティウス3世に対し、臣従の礼を執ったことにより、フィリップ2世は、聖戦として、イングランドを攻撃することができなくなった。

反対に、ジョン王は、大陸での失地回復に、勢力を使うようになった。

フィリップ2世は、イングランド侵攻に参加しなかったフランドル伯 (Count of Flanders) を、攻撃するために、フランドル沖に、フランス艦隊を集結させていた。

だが、その情報を得たジョン王の援軍、ソールズベリー伯ウィリアム=ロングスワード (William Longsword, Earl of Salisbury) 率いるイングランド艦隊500隻が、1213年5月28日、ブルージュ港のダム (Damme) 沖で停泊していた、フランス艦隊1,700隻を、撃破した⁸⁰⁾。

これに功を奏したジョン王は、今度は、甥の神聖ローマ帝国ドイツ皇帝ヴェルフェン家オットー4世とフランドル伯フェラン (Ferrand)、ブルゴーニュ公、ホーランド伯 (Holland)、ブラバント伯 (Brabant)、リムブルク伯 (Limburg)、ロレーヌ公 (the Duke Lorraine) と提携し、フランスを南北から攻撃する計画を立てた⁸¹⁾。

だが、その計画は、1214年4月27日、ブーヴィーヌの戦い (the Battle of Bouvines) で、フィリップ2世により、撃退させられた⁸²⁾。

78) Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *ibid.*, p. 457.

79) Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *ibid.*, p. 457.

80) Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *ibid.*, p. 461.

81) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 431.

ブーヴィーヌの敗戦により、ジョン王は、重課税を強いらせてきたイングランドのバロンや国民から、完全に信頼を失った。

ジョン王の経済政策の失敗により、イングランド国民の生活は、疲弊していた。

特に、農民にとっては、命ぎりぎりの生活であった。

言い換えるとバロン、ナイト、市民たちは、恣意的な重課税を強いるジョン王に、もはや、我慢できなくなっていた。

そこで、イングランド国民は、ジョン王の権力に対し、ある程度の制限を成す法律を、ジョン王に課することで、一致団結した。

その結果、ジョン王は、1215年6月15日、王権を限定させられる憲法マグナ=カルタ (Magna Carta : 大憲章) に、自著捺印せざるを得なくなった。

この1215年のマグナ=カルタ、自由憲章のオリジナルは、残っていない。

現存するのは、1215年6月19日のラニーミード (Runnymede) 会談後、簡略化された写本であり、それは、写本として4通ある。2通は大英図書館、1通はリンカーン大聖堂、1通はソールズベリー大聖堂にある⁸³⁾。

このラニーミードのマグナ=カルタは、63カ条項からなり、その重要な条項を2つ抜き出して、下記に述べてみる。

第39条 どんな自由人も、同僚の法に合った判断、あるいは国法によるものでなければ、逮捕されたり、投獄されたり、侵奪されたり、法的保護外にされたり、追放されたり、何らかの方法で侵害されることはない。また余は、人を攻撃しないし、人を攻撃するために、誰かを送らないであろう⁸⁴⁾。

第40条 誰に対しても、余は、正義と司法とを、売らないし、拒まないし、遅延させることもないであろう⁸⁵⁾。

82) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 431.

83) David C. Douglas and George W. Greenaway, *English Historical Documents*, Vol. 3, Second Edition, reprinted of 1953, ed., Routledge, 1981, p. 316.

84) David C. Douglas and George W. Greenaway, *English Historical Documents*, Vol. 3, *ibid.*, p. 320.

なお、63カ条から成るマグナ=カルタの主要約すると、下記の6項目になる。

1. 教会は、国王から自由であること。
2. 聖職者は、自由な選挙権を有し、大司教、司教、修道院長の選出ができること。
3. 封建制度下にあるイングランドの借地人は、規定の支払い以外に、何らかの金銭を、国王に支払う義務がないこと。
4. 王の決定だけで、戦争協力金などの税金を、徴収されないこと。
5. ロンドンのような自由都市、司教座都市は、交易が自由にでき、関税を自由に決めることができること。
6. 自由人は、その何人かを問わず、その仲間の判決文、国法により、無罪であれば、懲罰を受けたり、投獄されたりしないし、法律上の保護外に置かれぬし、苦しめられることもないこと。

ジョン王は、この自著捺印したマグナ=カルタに対して、不満であった。

そこで、ジョン王は、このマグナ=カルタへの誓約を、無効にするよう教皇インノケンティウス3世に頼んだ。

1215年8月24日、教皇インノケンティウス3世は、裁判に訴えられるべき事件が、下劣で卑劣で、さらに不法や不正によってすべて解決されたことに対し、非常に怒りを感じ、マグナ=カルタを、無効にした⁸⁵⁾。

これに対し、バロンたちは、フィリップ2世の息子ルイ（Louis：その後のルイ8世LouisVIII：在位1223-1226）に救援を求めた。

ルイは、軍隊を率いて、イングランドに渡った。

丁度その時、ジョン王は、財宝を積んだ荷車が、ウォツシュ河口の砂地にて、高波にさらわれ流されてしまったことに、悲しみ、モモをつまみに、リング

85) David C. Douglas and George W. Greenaway, *English Historical Documents*, Vol. 3, *ibid.*, p. 320.

86) Cf. Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 479.

酒を飲んでいて。

その飲み過ぎと食べ過ぎが原因で、ジョン王は、1216年10月19日に亡くなった⁸⁷⁾。

VII おわりに

リチャード1世の弟ジャンが、イングランド王ジョンになった時、アンジュー帝国は、父リチャード1世治政治の時より、多少縮小されたものの、フランス王フィリップ2世の領土よりも、はるかに広大であった。

ジョン王は、イングランド王として、またプランタジネット家の後継者として、このアンジュー帝国を維持、拡大しなければならなかったのだが、現実には、徐々に、縮小してしまった。

ジョン王は、縮小した大陸領土の回復のため、幾度か、フィリップ2世と戦った。

その戦いのため、ジョン王は、イングランドのバロンたちから、恣意的な戦費、さらにスキューテイジを徴収した。

だが、戦いは、敗戦に続く敗戦であった。

この敗戦により、イングランドのバロンをはじめ、ナイト、市民たちの生活は、窮乏する一方であった。

また、この敗戦により、ジョン王は、イングランドのバロン、ナイト、市民たちから、信頼を失っていった。

戦いが続けば続くほど、ジョン王の信頼は、限りなく失われていった。

さらに、ジョン王は、教皇インノケンティウス3世と対立することによって、教会からも、信頼を失った。

この教会との対立により、ジョン王と、イングランド国民との距離は、修復不可能な状態に陥った。

イングランド国民の生活は、もはや限界に来ていた。

そこで、イングランドのバロンたちは、ジョン王に対し、王権の制限、恣

87) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 446.

意的な重課税の廃止を求める憲章、マグナ=カルタを、自著捺印させることになった。

ジョン王にとって、不本意であったが、イングランド国民にとって、勝利であった。

なお、ジョン王の敗戦原因は、ジョン王自身の交渉下手な性格、戦略なしの経済政策である。